

# 青年期用感謝尺度の信頼性と妥当性の再検討

岩崎 眞和・五十嵐透子

## 要 約

本研究では、日本人青年の感謝を包括的に測定するために作成された“青年期用感謝尺度 (Japanese Adolescent Appreciation Inventory; J-AAI)” (岩崎・五十嵐, 2014b) の測定精度の更なる向上に向け、因子的妥当性と再検査信頼性を検証した。質問紙調査によって得られた大学生と大学院生および専門学校生計639名 (男性254名, 女性385名) の回答を分析対象とし、抽出されている因子構造モデル (“実存” “享受” “比較” “喪失” “返礼” “負債感” “忘恩”) の適合度の良好さと各因子の信頼性の高さ ( $\alpha = .62 - .88$ ,  $r = .45 - .83$ ) を確認した。今後の課題として、本尺度への“社会的望ましきバイアス”の影響と日本人を含む東アジア文化圏における成人期以降の対象への適用拡大に向けた検証, および短縮版作成の必要性を論じた。

## 1. 問題と目的

2000年代半ば頃より、日本人の感謝に焦点化した研究の蓄積が進んでいるが、その基盤となる既存の日本人用の感謝尺度には得点項目の偏りや日常生活で体験される感謝の包括的測定に不向きであるといった諸課題が指摘されている (岩崎・五十嵐, 2014a)。また、欧米をはじめとする世界各国の感謝研究でもっとも使用頻度が高く、基準的尺度といえる Gratitude Questionnaire-6 (McCullough, Emmons & Tsang, 2002; 以降, GQ-6と略記) について複数の邦訳版 (例えば, 相川・矢田・吉野, 2013; Hatori & Kodama, 2014; 小林, 2013; 白木・五十嵐, 2014) が作成されており, なかでも白木・五十嵐の尺度は原著者の邦訳許可を得て作成されている。しかし, 上記尺度の邦訳内容が微妙に異なっているために相互の得点を等価とみなすことが難しいことに加え, 構造方程式モデリング (structural equation modeling; SEM) による確証的因子分析結果から中国語版GQ-6 (Chen, Chen, Kee, & Tsai, 2009) と同様に日本でも逆転項目である「6. Long amounts of time can go by before I feel grateful to something or someone. (誰かや何かに対し感謝を抱くのは, しばらく経ってからだ)」の除外が望ましいことが指摘されている (白木・五十嵐, 2014)。また, 年齢を重ねるにつれて感謝を抱くようになるという主旨の項目5も, 人生経験が豊富な成人期以降を対象とする場合には回答しやすいかもしれないが, 青年期以前の対象には不向きな項目表現と思われる。加えて, こうした背景には“恩”や“考”といった感謝の感情体験に関する東アジア文化圏特有の特徴 (森, 2015; Wangwan, 2004, 2005) や, 発達段階に応じて十分に測定できにくい課題が影響していると考えられる。したがって, 日本人の感謝研究の蓄積に向けては感謝に伴う肯定的感情にのみ焦点化されているGQ-6では限界があり, 東アジア文化圏ではGQ-6が感謝研究の基準的尺度として十分に確

立していないといえる。

他に、本邦独自の感謝尺度として池田（2006）が作成した“母親に対する感謝の心理状態尺度”（33項目、5件法）と日本人が日常的な対人関係場面で体験する感謝の測定を目的に作成された“感謝感情—行動尺度”（相川，2013；22項目、7件法）が挙げられる。池田の感謝尺度は、父親と母親に関し別々に回答する“両親への感謝尺度”（池田，2011）として改変・短縮されている。しかし、クロス・マーケティングを通じたweb調査により20—50歳代の成人期全般への適用可能性を検証した池田（2014）では、父親と母親への感謝を表すそれぞれ4因子構造の確証的因子分析の適合度指標のうちGFIとAGFIがともに.66以下の値であり、中学生から大学生までの青年期用に開発された池田（2006）の尺度の成人期への適用には課題があると思われる。一方、“感謝感情—行動尺度”を用いた吉野・相川（2015）の探索的因子分析（主因子法・Varimax回転）では、多重負荷量を示す項目が散見されるものの感謝に伴う感情体験を表す3因子（“家族への感謝感情”“友人への感謝感情”“すまない感謝感情”）と、それらに伴う言語的表出行動を表す3因子（“家族への感謝行動”“友人への感謝行動”“儀礼的な感謝行動”）からなる6因子構造が再現されており、信頼性も $\alpha = .79 - .90$ と十分な値が得られている。本尺度の特徴として日常生活での重要な他者である家族や友人との対人関係場面における感謝に特化している点と、「21. 感謝すべき状況であれば、心では感謝していなくても感謝の言葉を口にする」に代表されるように感謝の感情体験を伴わないが表面的には感謝の言葉を伝える“儀礼的な感謝行動”因子（ $\alpha = .81$ ）の存在が挙げられる。吉野・相川は“儀礼的な感謝行動”が“友人からの手段的なソーシャル・サポートの知覚”を促進する結果を報告しており、たどるところから感謝を抱いていなくても感謝の言語的表出が対人関係の相互性にポジティブな影響をおよぼすソーシャル・スキルとして機能しうる可能性を考察している。加えて、Grant & Gino (2010) も感謝の表出に伴う自己評価へのポジティブな影響を報告している。したがって、本因子はこうしたソーシャル・スキルとしての感謝の言語表出行動が対人関係におよぼす効果とそれに伴う自己評価への影響の解明に寄与すると考えられるが、本尺度を用いた研究の蓄積は未だ少なく今後の課題といえる。

こうしたなか岩崎・五十嵐（2014b）は、既存の日本人用の感謝尺度の諸課題を踏まえ対人関係場面に限らず日本人青年が日常生活で体験する感謝の認知面、感情面、行動面を多面的に測定可能な“青年期用感謝尺度 (Japanese Adolescent Appreciation Inventory)”（36項目、5件法；以下、J-AAIと略記）を作成し、その信頼性と妥当性を検証した。本尺度は、感謝に伴う肯定的感情の体験とそれを表出する傾向に加え、日本人特有の喜びに負い目や負債感が混在する傾向や感謝とは対極の恩知らずな傾向の測定に適した計7因子で構成され、part 2の“喪失”は回答者の心理的負担に配慮した教示を採用している。近年、箕島・渡辺（2015）は本尺度のpart 1を中学生や高校生にも適用して“学校適応感”との関連を検証し、思春期も含め青年期全般で使用可能と考えられる。しかし、本尺度については構成概念妥当性の1つである因子的妥当性の評価と各因子の再検査信頼性が未検証な点と、“返礼”に.36の負荷量を示したものの「13. 人生で一番辛かったときのことを考えると、今はまだ幸せだと思う」が感謝の表出傾向を測定する他の5項目と意味的に異なる点に課題があると考えられる。因子的妥当性の検証に際しては、理論的検討に基づいて設

定されたモデルに実際のデータを当てはめてモデルの適合度を検討する必要がある、その方法として分析者の恣意性が入りにくい確証的因子分析による検証が推奨されている（豊田, 2000）。これらの課題を検証することにより、日本人青年を対象とした感謝研究での更なる活用が可能になるとともに、感謝がwell-beingや精神的健康を高めるメカニズムおよび感謝と日本人の自己の発達の関連についての文化的背景を視野に入れた多角的な視点からの理解が進むと考えられる。

以上を踏まえ、本研究では岩崎・五十嵐（2014b）とは異なる対象への質問紙調査によって、J-AAIの因子的妥当性と再検査信頼性の検証を行うこととした。その際、part 1の確証的因子分析において項目13を“返礼”に含むモデル（計30項目）と含まないモデル（計29項目）の適合度を比較し、本尺度に含めることの可否を併せて検討した。

## 2. 方法

### (1) 調査手続き

2014年6月下旬から同年7月下旬にかけて、甲信越地方のA大学（学部2・3年生と大学院生1・2年生）と専門学校3校（1－3年生）で講義終了後の集合調査法による無記名式の質問紙調査を実施し、計670名の回答を得た。また、分析対象のうち調査協力の得られた専門学校2校の学生105名（男性40名、女性65名）を対象に4週間のインターバルを空けて再検査を実施した。なお、本研究は調査当時に著者らが所属していたB大学研究倫理審査委員会の承認を得て行われた。

### (2) 調査材料

質問紙は、性別と年齢についての項目を記載したフェイスシートと、J-AAI（岩崎・五十嵐, 2014b；36項目、5件法）を用いた。ただし、岩崎・五十嵐とは全項目配置を変更しており、検討対象である項目13は項目30に配置した。なお、再検査時にも項目配置を改めてランダム化するとともに、part 1とpart 2を交互に入れ替えた2パターンを用いた。

### (3) 分析対象

記入に不備がみられなかった639名（有効回答率95.4%；男性254名、女性385名）を分析対象とした。平均年齢は21.10歳（ $SD=2.09$ ,  $range: 18-27$ 歳）であった。なおpart 2では26名（4.1%）が未回答であったため、“喪失”因子に関する分析対象のみ613名（男性240名、女性373名）とした。

### (4) 分析ソフト

本研究の分析には、統計処理ソフト「IBM SPSS Statistics 24 for Windows」と「IBM SPSS Amos 24 for Windows」を用いた。

## 3. 結果

### (1) J-AAIの因子構造

J-AAIは教示文の異なる2部構成のため、part別に検討した。“喪失”を含まないpart 1

表1 青年期用感謝尺度の確証的因子分析結果

項目	標準化推定値						
	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
<i>F1: 実存 (α = .78)</i>							
14. 今の生活や生きていることを楽しいと感じる	.76						
13. 私の人生は感謝することに満ち溢れている	.71						
19. 私の人生は恵まれている	.69						
4. 今、この瞬間に満足している	.62						
16. 今所持しているもので満足している	.47						
<i>F2: 享受 (α = .81)</i>							
25. 周りの人たちのおかげで幸せに暮らせていると思う		.74					
24. 生活のなかで得ているものに感謝している		.73					
12. さまざまな人たちに感謝している		.72					
21. 生まれてきたことに感謝している		.64					
30. 友人と過ごす時間に感謝している		.62					
<i>F3: 比較 (α = .73)</i>							
2. 元気に生活を送れていることに感謝している			.81				
1. 自分の健康状態に感謝している			.73				
17. 生活に必要な衣食住が満たされている私は恵まれている			.55				
15. 私より不運な人のことを考えると、自分は恵まれている方だと思う			.48				
28. ニュースや新聞で事故の報道があると、自分が無事であることに感謝する			.47				
<i>F4: 返礼 (α = .76)</i>							
6. 感謝していることをすべて書き出すと、たくさんある				.78			
7. 日々「ありがとう」といった感謝の言葉を言っている				.67			
5. 私がしてもらってありがたいことは、周りの人にもしている				.62			
20. どれほど私が感謝しているかを周りの人たちに伝えている				.53			
9. 感謝の印としてプレゼントや贈り物をする				.50			
<i>F5: 負債感 (α = .88)</i>							
22. 周りの人たちに感謝とともに申し訳なさを感じている					.96		
23. さまざまな人たちに感謝とともに申し訳なさを感じている					.93		
18. 友人から何かしてもらった時や世話になった時は、感謝と同時に申し訳なく感じる					.74		
10. 何かしてもらったら感謝とともに申し訳なく感じる					.70		
27. 家族には感謝とともに申し訳なさを感じている					.50		
<i>F6: 忘恩 (α = .62)</i>							
29. 私が得ているものは当然のものなので、感謝する必要はない						.77	
8. 周りを見ても、感謝することはほとんどない						.52	
3. 友人が私のために何かしてくれるのは当然のことである						.42	
26. 家族が私に何かしてくれるのは当たり前のことだと思う						.37	
<i>F7: 喪失 (α = .87: 本因子のみpart 2)</i>							
5. 周りの人たちに感謝するようになりましたか							.80
6. 所有しているものや得ていることの価値や大切さを考えるようになりましたか							.75
2. 身近で親しい人たちを大事にするようになりましたか							.74
4. 日々の生活や時間を大切にするようになりましたか							.72
1. 生きていることや自分の健康状態に感謝するようになりましたか							.69
3. 命の大切さを実感するようになりましたか							.66
因子間相関	実存 (F1)	—					
	享受 (F2)	.73	—				
	比較 (F3)	.66	.68	—			
	返礼 (F4)	.58	.67	.48	—		
	負債感 (F5)	-.02	.09	.09	.08	—	
	忘恩 (F6)	-.07	-.17	-.05	-.07	-.01	—
	喪失 (F7)	.34	.42	.30	.34	.14	-.09

表2 各感謝因子の信頼性と性別ごとの得点

items	(α)	信頼性		範囲		男性		女性		df	t	d		
		α	r	Min	Max	M	SD	M	SD					
実存	5	.84	.78	.77	1.00	5.00	3.39	.79	<	3.55	.73	437.12	2.53**	.23
享受	5	.82	.81	.83	1.40	5.00	3.87	.75	<	4.07	.61	394.06	3.36***	.31
比較	5	.73	.73	.75	1.00	5.00	3.70	.77	<	3.89	.68	421.05	3.04***	.28
返礼	5	.76	.76	.72	1.00	5.00	3.28	.74	<	3.62	.65	423.02	5.69***	.52
喪失	6	.89	.87	.67	1.00	5.00	3.12	1.04	<	3.50	.85	375.55	4.52***	.40
負債感	5	.87	.88	.60	1.00	5.00	3.19	.89		3.22	.86	454.19	.34	.05
忘恩	4	.67	.62	.45	1.00	4.00	1.97	.65	>	1.76	.48	368.06	4.17***	.35

注) 岩崎・五十嵐 (2014b) で算出されたα係数を(α)に記載した。 \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

(30項目) について、岩崎・五十嵐 (2014b) の6因子構造と因子間相関を仮定した確証的因子分析を行ったところ、適合度指標は $\chi^2(390)=1892.73, p<.001, GFI=.89, AGFI=.87, CFI=.91, TLI=.90, RMSEA(90\%CI=.05, .06)=.06, AIC=1266.53$ と、概ね許容しうる適合度を示した。次に「30. 人生で一番辛かったときのことを考えると、今はまだ幸せだと思う」を除いた6因子構造で同様の確証的因子分析を行ったところ、 $\chi^2(362)=1766.81, p<.001, GFI=.91, AGFI=.89, CFI=.93, TLI=.92, RMSEA(90\%CI=.04, .05)=.05, AIC=1077.78$ と先のモデルよりも良好な適合度を得た。以上の結果と“返礼”因子の項目内容の双方を鑑み、part 1については項目30を除いた後者の6因子構造モデル(29項目：表1)の採用を妥当と判断した。

“喪失”を測定するpart 2(6項目)についても岩崎・五十嵐 (2014b) の1因子構造を仮定した確証的因子分析を行ったところ、 $\chi^2(9)=68.69, p<.001, GFI=.99, AGFI=.96, CFI=.99, TLI=.98, RMSEA(90\%CI=.03, .09)=.06$ と良好な適合度を示した。

## (2) 各感謝因子の信頼性と性差

先の確証的因子分析の結果を踏まえ、各因子の内的一貫性と再検査信頼性をそれぞれ算出した(表2)。その結果、“忘恩”で $\alpha=.62, r=.45$ と低い値であったが、他の6因子では許容しうる内的一貫性( $\alpha=.73-.88$ )と中程度以上の有意な再検査信頼性( $r=.60-.83$ )が認められたことから、本尺度が一定の安定性を備えていることが確認された。またWelchのt検定により各感謝因子の性差を検討した結果、“負債感”を除く6因子で岩崎・五十嵐 (2014b) と類似の有意差がみられ、なかでも“返礼”の効果量(Cohen’s d)は中程度の値を示した(表2)。

## 4. 考察

本研究では岩崎・五十嵐 (2014b) が作成したJ-AAIの妥当性と信頼性の更なる向上を目的に、本尺度の因子構造の安定性と再検査信頼性の検証を行った。因子構造については、当初は“返礼”に含まれていた1項目を除外したものの、確証的因子分析の結果、想定した因子構造(35項目；岩崎・五十嵐, 2014b)で十分な適合度を得られた。岩崎・五十嵐の研究では予備調査と本調査の間に日本人の感謝や幸福観に多大な影響をおよぼしたと思

われる東日本大震災（電通総研，2012）が発生したが，そうした出来事の前後でも類似の因子構造が再現されたことを考慮すると，本尺度の7因子構造モデルは十分な因子的妥当性を有していると考えられる。

また各因子の信頼性について， $\alpha$ 係数値は岩崎・五十嵐（2014b）と同水準の統計解析上許容されうる値が得られるとともに，再検査信頼性も“忘恩”（ $r=.45$ ）を除いては.60以上の値であった。再検査信頼性係数の評価については測定概念の特徴やサンプルサイズ，測定間隔，因子の項目数など複数の要因が関与しているため明確な基準の設定は困難であるが，創刊から2015年末までの「心理学研究」に掲載された研究論文の再検査信頼性係数に関するメタ分析では， $r=.50$ を下回ると多くの研究者が「再検査信頼性が不十分」と評価する傾向が指摘されている（小塩，2015）。小塩の報告に基づけば，“忘恩”に関しては他の6因子と比べて信頼性の低さは否めないが，他の感謝因子と比べて項目数が4項目と少ないことに加え，相対的に“相互独立的自己観”よりも周囲との調和や協調が重視される“相互協調的自己観”が優位な日本人にとっての率直な回答のしにくさも影響していたことが推測される。しかし本因子は，惰性的回答の防止に寄与することで本尺度の妥当性を高めたり，感謝と対極の“恩知らず”状態の心理学的知見の集積に寄与する可能性を有しており，今後も“忘因”を含む7因子構造（35項目，5件法）の尺度として用いることに意義があると思われる。

感謝の性差に関しては，“中核的因子群”（“実存”“享受”“比較”“返礼”“喪失”）は男性に比べて女性の得点が有意に高く，逆に“忘恩”は女性よりも男性の得点の方が有意に高い傾向にあり，“負債感”では有意な性差は示されなかった。“中核的因子群”の有意な性差は，欧米の感謝研究や国内の池田（2006）の親に対する青年期の感謝と，藤原・村上・西村・濱口・櫻井（2014）の児童期の感謝に関する研究，さらに大学生の感謝に関する伊藤・平井（2013）や伊藤（2014）の研究などを支持する結果であり，男性よりも女性の方が感謝を抱き表しやすいことが再度確認された。藤原他（2014）は，McCullough et al.（2001）にならい感謝を共感性や向社会的行動と密接な関連を持つ感情の1つととらえて，対人関係で体験される感謝と共感性に中程度の正の関連があることを報告している。仲間との協調関係や友人への共感性，向社会的行動は女性の性別役割行動として重要な要素の1つでもあり（川口，2013），結果として“感謝”を体験し表出する機会が男性に比べて相対的に高い可能性が推測される。これは，男性に比べて女性の方が感謝を感じて表明することへの葛藤や抵抗が少ないというFroh, Yurkewics, & Kashdan（2009）の結果も支持している。また本研究では有意な性差がみられなかった“負債感”については，池田（2017）が“すまなさ感情（feelings of sumanasa）”ととらえその心理的意味や対人関係への影響についてレビューしている。池田は“負債感”や“すまなさ感情”は自己洞察や他者との関係形成とその維持などに寄与する機能を有する反面，自己否定的な心理状態に陥りやすくなる側面もあることを考察しているが，こうした機能や心理的影響のプロセスにおける性差の解明は未だ十分とはいえない。以上を踏まえ，今後も日本人の感謝研究を進める上では性別ごとの感謝の効果や影響の異同を明確化するために，“負債感”も含め男性と女性を分けて統計解析を行う方が望ましいと思われる。

最後にJ-AAIの今後の検討課題について，3点述べる。第1に，本尺度への“社会的望ま

しき”の被影響性が未検証な点である。日本で開発された感謝尺度はいずれも“社会的望ましき”との関連が検証されていないが、Tsang(2006)や池田(2015)が指摘するように社会通念上望ましいと思われる“感謝”の概念を自己報告式の質問紙で測定する際には“社会的望ましきバイアス”が影響しやすいと考えられる。坂口・中川・永村・守(2009)は、社会心理学領域で広く用いられている“潜在連想テスト(Implicit Association Test)”(Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)の原理を生かしつつ、アンケート形式で集団実施できるよう改良したFiltering Unconscious Matching of Implicit Emotion Test(Mori, Uchida, & Imada, 2008; 通称, FUMIEテスト)を用いて、“感謝”に対する潜在意識下での好感度が非常に高く、ポジティブな概念として認識されていることを明らかにしている。したがって、GQ-6(McCullough et al., 2002)と同様にJ-AAIの全項目および各因子と“社会的望ましき”との関連を検証し、相互の関連が弱いことを確認しておく必要がある。第2に、本尺度の適用対象の拡大である。本尺度は、項目作成の段階より中学生や高校生にも適用可能な文章表現を採用するとともに、日本人の感謝の生涯発達の検証を視野に成人期にも適した因子構成を考慮して作成されている。現在、池田(2014)以外には成人期用の感謝尺度は見当たらないが、両親への感謝だけでなく対人関係を含め日常生活で体験される感謝を包括的に測定する感謝尺度として本尺度を活用するためにも成人期への適用可能性を検証する試みが必要である。加えて、Wangwan(2004, 2005)がタイ人も日本人と同様に感謝に負債感が伴うことを明らかにしていることから、日本以外の東アジア文化圏の対象への適用拡大も検討する意義があると思われる。第3に、本尺度の短縮版の作成が挙げられる。感謝の包括的把握を目的に作成されたJ-AAIは、その多因子構造に特徴があるものの、それ故にpart 1とpart 2を併せて計35項目となった。感謝に焦点化した調査であれば今後も本尺度の使用が望ましいが、他の尺度と併用し相互の関連を検証したり、臨床場面での活用可能性などを考慮すると、多因子構造を維持しつつ項目を更に精選した短縮版の作成も有用と考える。これらの課題について更なる検証を行うことで本尺度の活用可能性を広げるとともに、日本を含む東アジア文化圏の人々の感謝に関する心理学的研究や、青年期以降の感謝の生涯発達過程の解明および感謝の視点に基づくアセスメントに寄与する研究の蓄積が望まれる。

## 引用文献

- 相川 充 (2013). 対人関係に及ぼすポジティブ効果に関する拡張・形成理論からの実験的研究—対人場面における感謝感情尺度および感謝行動尺度の作成—平成23・24・25年度科学研究費助成事業(基盤研究C. 課題番号23530815)研究成果報告書
- 相川 充・矢田さゆり・吉野優香 (2013). 感謝を教えることが主観的ウェルビーイングにおよぼす効果についての介入実験 東京学芸大学紀要, 64, 125-138.
- Chen, L. H., Chen, M., Kee, Y. H., & Tsai, Y. (2009). Validation of the gratitude questionnaire (GQ) in Taiwanese undergraduate students. *Journal of Happiness Studies*, 10, 655-664.
- 電通総研 (2012). 「震災一年半後の意識・ライフスタイル」レポート. <http://www.dentsu.co.jp/news/release/2012/pdf/2012104-0921.pdf> (2017年9月1日取得)
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. K. L. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.

- Froh, J. J., Yurkewicz, C., & Kashdan, T. B. (2009). Gratitude and subjective well-being in early adolescence: Examining gender differences. *Journal of Adolescence*, *32*, 633-650.
- 藤原健志・村上達也・西村多久磨・濱口佳和・櫻井茂男 (2014). 小学生における対人的感謝尺度の作成 教育心理学研究, *62*, 187-196.
- Grant, A. M., & Gino, F. (2010). A little thanks goes a long way: Explaining why gratitude expressions motivate prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, *98*, 946-955.
- Hatori, K., & Kodama, M. (2014). Development of Japanese version of the Gratitude Questionnaire-6 (J-GQ-6). *Proceedings of Cognitive and Behavioral Psychology*, *3*, 17-22.
- 川口 章 (2013). 日本のジェンダーを考える 有斐閣
- 小林 太 (2013). 日本語版感謝尺度 (Gratitude Questionnaire) の信頼性と妥当性 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 127.
- 池田幸恭 (2006). 青年期における母親に対する感謝の心理状態の分析 教育心理学研究, *54*, 487-497.
- 池田幸恭 (2011). 大学生における親に対する感謝と個人志向性・社会志向性との関係 和洋女子大学紀要, *51*, 163-178.
- 池田幸恭 (2014). 成人期を中心とした親に対する感謝の検討 和洋女子大学紀要, *54*, 75-85.
- 池田幸恭 (2015). 感謝を感じる対象の発達的变化 和洋女子大学紀要, *55*, 65-75.
- 池田幸恭 (2017). 感謝に伴うすまな感情の検討 和洋女子大学紀要, *57*, 65-74.
- 伊藤忠弘 (2014). 感謝を感じる経験と感謝される経験における感情 学習院大学文学部研究年報, *61*, 99-117.
- 伊藤忠弘・平井 花 (2013). 大学生の日常的な感謝感情および感謝された経験と他者志向的達成動機 学習院大学文学部研究年報, *60*, 159-175.
- 岩崎真和・五十嵐透子 (2014a). 日本人用感謝尺度の作成に向けた課題 上越教育大学心理教育相談研究, *13*, 55-65.
- 岩崎真和・五十嵐透子 (2014b). 青年期用感謝尺度の作成 心理臨床学研究, *32*, 107-118.
- McCullough, M. E., Emmons, R. A., & Tsang, J. A. (2002). The grateful disposition: A conceptual and empirical topography. *Journal of Personality and Social Psychology*, *82*, 112-127.
- 簗島天馬・渡辺弥生 (2015). 青年期における感謝概念の発達と学校適応の関連について 第57回教育心理学会大会発表論文集, 708.
- Mori, K., Uchida, A., & Imada, R. (2008). A paper-format group performance test for measuring the implicit association of target concepts. *Behavior Research Methods*, *40*, 546-555.
- 森 貞彦 (2015). 『菊と刀』の読み方—未来の文明のために— 東京図書出版
- 小塩真司 (2016). 心理尺度構成における再検査信頼性係数の評価—「心理学研究」に掲載された文献のメタ分析から— 心理学評論, *59*, 68-83.
- 坂口雅彦・中川明子・永村和哉・守 一雄 (2009). 理科教育実践の効果を科学的に測定・評価する取り組み—FUMIEテストの利用— 信州大学教育学部研究論集, *1*, 15-27.
- 白木優馬・五十嵐祐 (2014). 感謝特性尺度邦訳版の信頼性および妥当性の検討 対人社会心理学研究, *14*, 27-33.
- Tsang, J. A. (2006). Gratitude and prosocial behaviour: An experimental test of gratitude. *Cognition and Emotion*, *20*, 138-148.
- 豊田秀樹 (2000). 共分散構造分析 (応用編) —共分散構造方程式モデリング— 朝倉書店
- Wangwan, J. (2004). 日本とタイの大学生における感謝心の比較研究 (1) 日本道徳性心理学研究, *18*, 8-14.
- Wangwan, J. (2005). 日本とタイの大学生における感謝心の比較研究 (2) 日本道徳性心理学研究, *19*, 1-12.
- 吉野優香・相川 充 (2015). 特性感謝がソーシャルサポートの知覚に及ぼす効果—感謝の利益発見機能からの検討— 筑波大学心理学研究, *49*, 33-43.

Evaluation of reliability and validity  
of the Japanese Adolescent Appreciation Inventory (J-AAI)

Masakazu Iwasaki, Toko Igarashi

The Japanese Adolescent Appreciation Inventory (J-AAI; Iwasaki & Igarashi, 2014a) was designed to assess Japanese adolescent appreciation comprehensively. This study examined the factorial validity by confirmatory factor analysis and 4-week test-retest reliability of the scale for improvement of measurement accuracy. Data were collected from 639 university undergraduate, graduate and vocational college students (254 males, 385 females) with questionnaires and retest conducted on 105 participants (40 males, 65 females) after 4 weeks. The results indicated that this scale has acceptable factorial validity and reliability ( $\alpha = .62-.88$ ,  $r = .45-.83$ ), and that this scale can be used as a tool for understanding Japanese adolescent appreciation. Suggestions for the future study were necessity to examine the influence of social desirability bias to this scale and to construct shortened version of this scale.

